



2001年(平成13年)
1月号(No. 668)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円

目次

21世紀の登山試論	1
平成12年度年次晩餐会	5
第3回秩父宮記念山岳賞の表彰・	7
激励は新たな出発日に	7

報告	
科学(委)・シンポジウム「山の	
トイレ問題を考える」	8
自然保護(委)・全国集会	8
山研運営(委)・焼岳登山	9
三水会・創立25周年	10
92同期会・鶴ガ鳥屋山	10
支部だより	11
秋田支部 山形支部	

東西南北	
ベック・ウェザーズ教授に会う	12
チリのタパカ火山に登る	13
ボブ・ハインド氏を偲んで	14
ネパールのマオイスト集団	15
ニューヨーク・タイムズを読んで	17
ひとくちインターネット	3・15
図書紹介	18

「リュックサック 80周年記念	
号」『生と死のミニャ・コンガ』	
「その山登り間違ってますね」	
「エリック・シンプトン」[across	
the frozen himalaya]	
図書受入報告・新入会員	20
山岳博物館散歩	9・21
会務報告	21
ルーム日誌	22
INFORMATION	23

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間	
月・火・木	10~20時
水・金	13~20時
第2、第4土曜日	閉室
第1、第3、第5土曜日	10~18時

二十一世紀の登山試論 エヴェレスト・スキー滑降と毎日登山家

江本 嘉伸

新しい世紀が始まった、といって私たちの日常がそんなに変わるわけではないが、百年、あるいは千年という、ひとりが生きぬくには長いひと単位の時間を人類が設定したのは、「歴史を哲学する」機会を与えるためであらう、と思う。

明治の日本人もそういう考えを持っていたようである。ちょうど百年前、「報知新聞」明治三十四年一月二日と三日付け紙面に「二十世紀の予言」という見出しの記事が出ている。「十九世紀は既に去り人も世も共に二十世紀の新舞台に現はるることとなりぬ、

十九世紀における世界の進歩は頗る驚くべきものあり、……との書き出しで、「物質上の進歩に就て想像するに」と、百年後の世界、つまり今現在私たちのいる時代を予測している。総じて、「八十日間を要した世界一周旅行は七日間でできるようになる」「馬車にかわって自動車普及する」「鉄道は時速二四〇キロのスピードで東京―神戸間を二時間半で走るようになる」「写真電話によって遠距離にいて買物ができるようになる」などなどかなり当たっていることに驚く。

ただし、予測の対象テーマは科学の進歩に関するものがほとんどで、個としての人間の能力の可能性については「小学校に獣語科ができ、人は犬、猫、猿と自由に会話できるようになる」など少々マト外れの予測しかない。南北極点もエヴェレストの山頂もまだ人を近づけていなかったこの時期、人間の生身の能力の「拡大」を予想すること自体、考えられなかったのかもしれない。

陸軍の航空兵科の生みの親として知られる長岡外史がストックホルムの博物館で薄い板切れを見たのは二十世紀のはじめ、一九〇二年のこと、その「スキー」という用具をどうこなすか、オーストリアの駐在武官レルヒ少佐が越後の高田師団で披露したのは一九一〇年になってからだ。いまや冬期スポーツの中心であるスキーの歴史も案外最近のものなのである。

■エクストリーム・スキーのエヴェレスト

二〇〇〇年秋になって、その薄い「板切れ」を使った滑降が世界の注目を集めた。スロベニアの登山家であり、エクストリーム・スキーヤー、ダボ・カルニツアルが、なんとエヴェレストの山頂からベースキャンプまで、スキー滑降に成功したので。

十月六日午後十時半、カルニツアルは仲間のフランク・オダーラップとサウスコルのC4を出発した。スキー・ブーツにアイゼンをつけ、七日前七時には頂上に達した。雪が多いのに驚いたという。準備や撮影に一時を費やしたあと、一七〇センチのスキーを履いて頂上からの滑降をスタートさせた。オダーラップと二人のシエルパは、足で下山した。



エヴェレスト、カルニツアルがスキー滑降に成功した 撮影・大森弘一郎

エヴェレストのてっぺんからスキーを履いて降りようという行為だ。しろうとは、ほとんど死に行くようなものじゃないか、と思う。ローツェ・フェースからテラテラに光ったサウスコル直下の斜面を見て、かつてそこをスキー滑降した三浦雄一郎の勇気に驚嘆した(当初はサーカスのようだ、と思っていた)のを覚えているが、人間の挑戦は果敢だ。ひとたび誰かが手をつけたなら、必ず越えようとする者が出てくる。

九二年フランスのピエール・タルディベルが南峰(八七六〇メートル)からスキーで滑降、九六年にはイタリアのハンス・カマランダーが頂上から北面をスキー滑降を試みたが、雪が少なく断念している。カルニツアル自身も九六年春に挑戦したが、凍傷にかかって中途断念、今回は二度目のチャレンジだった。

エクストリーム級の技術は想像を絶する。雪が多かったせい、難関中の難関と思われるヒラリー・ステップの下りについては、

「最初の登頂者にとっては大変な場所だったんだろうが、私にとってはそれほどではなかった。それよりは、南峰へ登りかえす時の雪崩を起こしそうな急斜面が難しかった」と、カルニツアルは後で語っている。

C4で登頂時デポしておいた三キ

ロのカメラをヘルメットに装着し、ローツェ・フェースへ。ここもあちこちに青氷が露出する難所だが無難に下り終えてC3で仲間たちの出迎えを受けた。ウェスタン・クウムの気持ちよい雪原を滑り、いよいよ最後の難関アイスフォールとなる。直前に大きなセラックの崩壊があり緊張したが、ルートを慎重に選びながら正午過ぎ、ついにベースキャンプへ到達した。(Davo Karicar

accomplished a full top to bottom ski descent from Everest)」と、隊のウェブサイトは、エヴェレスト頂上からの初の完全スキー滑降を世界に伝えた。

カルニツアルの祖国スロベニアは、面積わずか二万平方キロ、人口百九十八万の小国。スキー滑降を果たした十月七日は、ユーゴスラビアからの独立発効を宣言した(一九九一年)記念の日にあたり、首都リュブリアナはじめ全国民が沸いた。

■世界唯一人、

毎日登山家・東浦奈良男

カルニツアルが頂上からスキーで下りはじめた頃、三重県度合郡の自宅からひとりの初老の男性が歩き出した。東浦奈良男。素足にじかに靴を履き、食べ物は何も持たない。途中、山の清水だけを飲む。



軽々とウォールを登る平山ユージ 「毎日登山家」東浦奈良男 撮影・江本

浦の毎日登山に二度、同行させてもらったことがある。座布団カバーを利用した手づくりのザックに鉈、ノコギリを入れ、黙々と車道を歩く。途中私が勧めたお茶も缶ジュースも受け取らな

一九八四年十月二十五日、五十九歳で印刷会社を退職するにあたって、東浦はユニークな誓いをした。「毎日好きな山に登る」と決めたのだ。「いよいよ時間の束縛から完全に解放された完全自由の第一日である。ああ毎日山行できるのだ。待ちに待った日、さああの山この山かけまわろう。血わき肉おどり足うなる……」(一九八四年十月二十六日)と、当時日記に書いた。

以後雨の日も風の日もそれを実行している。十六年あまりたち、七十六歳を目前にした二〇〇一年一月一日現在、連続登山の記録は実に「五千九百十二日」となる。

東浦がすごいのは、すべて自力で山に登っていることだ。電車も車もつかわないので、毎日登頂となれば、ふだんは家の近くの山が中心となる。十数キロ離れた山まで自宅から歩き出し、登るとまた歩いて帰る。豪雨にずぶ濡れになると、吹雪であろ

うと、台風に飛ばされそうになると登り続け、伊勢湾をみおろす朝熊(あさま)山には三千百回登った。はじめは「一千山」が目標だったが、三千山をこなす頃、「一万山」を目標に設定し直した。

毎年夏の間だけはしばしば遠出する。好きな富士山に登るのだ。それも毎日登山だから近くの山を登った足で夜の列車に飛び乗り、富士宮口から登る。下山したらすぐ家に帰り、翌日はまたいつもの山へ、というあわただしさである。ひと夏大体二十回ほど登り、富士山登頂はすでに三百五十回を越えた。

一年前の二〇〇〇年一月、東浦の毎日登山に二度、同行させてもらったことがある。座布団カバーを利用した手づくりのザックに鉈、ノコギリを入れ、黙々と車道を歩く。途中私が勧めたお茶も缶ジュースも受け取らな

い。自動販売機はいつさい使いませんと、と言われてしまった。

そのかわり、山に入って清水の湧く場所であまそうに水を飲んだ。

「なぜ山に登るといえるならば、山清水を飲みたくてといえる。山の水の旨さはこの世で最高である(日記から)。ああ、そうだった、と私は自分を恥じた。

東浦は、最近耳が遠くなった。車道を一緒に歩きながら、そのことが気になって注意申し上げた。車が結構多く、事故が心配だったのだ。

二〇〇〇年五月三十一日、心配が現実になった。国東山に登って帰宅途中、自宅近くで車にはねられたのだ。車はそのまま逃走した。左膝をやられ、二本杖にすがらないと家の中も歩けない状態だったが、東浦は、病院に行つてドクター・ストップが出たことを恐れた。

翌日、自転車を手足だけで片漕ぎしながら山の麓まで行き、這うようにして登った。「痛くてしんどくて、山の上で五時間寝ました」三カ月ほどで足は治ったが、いまも正座はできない。

そこまでやらなくとも……、それでは記録マニアの奇人に過ぎないではないか、と言いたくなるだろう。が、それは少し違う。

東浦の話には「自由」という言葉がよく出てくる。前述した定年退職前後の日記にも特別に「自由」と書いた付箋が貼られている。

長い間、印刷職工として働き続けてきた東浦にとって、定年は自由な時間をもたらす大事な節目だった。どうせなら好きなことをしたい、と毎日山に登ることにしたのだが、その自由を貫くために、どんな条件の日でも続ける、という困難を自分に課したのである。

■自由と困難

カルニツアルの「エヴェレスト・スキー完全滑降」の話とまったく無縁のようにみえる東浦奈良男の「毎日登山」。しかし、そこには登山の本質である「自由と困難の追求」のテーマ(受け取り方によつては、「変人奇人の冒険」ともなる)が共通して存在するように思う。

人間の営みには生産をもたらすものと、何ら生産的なものをもたらさないものがあるが、「登山」という個人的な行為はその中でも後者の代表格といえるだろう。

それでも、登山が人々を惹きつけるのは、選り抜かれたエキスパートでなくとも、日常生活にはない「困難」と「喜び」の共存を実体験できるからだ。ただし、困難は激しければ激しいほど感動が深いのに、実際に

は多くの登山愛好者は「できるだけ安全、かつラクな登山」を求めがちなため、その分他人の、より踏み込んだ思いきった挑戦にあこがれたり、逆に(その裏返しとして)無謀、行き過ぎ、と批判したりするのである。百年前の「報知新聞」は予測し得なかったが、二十世紀は、地球という星が際限なく探検できる存在ではない、ということを感じさせた百年だった。無論、未知の地域はまだまだあるにしても、前人未踏の場所がわずかになったことは否定できない事実である。しかし、二十世紀の最後になってもかつての価値基準がなお残っていて、登山や探検旅行の行為者に対して変わらぬ讚美が寄せられたりしている。たとえば、エヴェレスト登頂や七大陸最高峰登頂、あるいは南極点到達は、いまでは個人レベルの楽しみや挑戦課題に過ぎないのに、社会的に過度に高い評価をしてしまう、というような。

どんな登り方をしていい、と思う。それが自由の素晴らしさだ。しかし、もう八千メートル峰というだけでは心動かされず、どんなふうに登ったか、だけが問われることになるだろう。その意味でしばらくは七千メートル峰、六千メートル峰の難ルートを求める時代が続くのではないか。

たとえば、昨年K2に単独登頂した山野井泰史が、九二年アマダブラム(六八五六メートル)西壁冬季初登、九八年にクスムガングル(六三六九メートル)東壁初登(いずれもソロ)など世界各地の六千メートル級の山でなしてあげている数々の登攀は、それを示唆している。

また、国内の山でも、「悪天候と雪質の悪さを求めて」黒部や剱の冬のバリエーション・ルートの連続登攀を実践している伊藤達夫(左京労山)のような登り方は、登山の本質である困難の追求の方法として刺激的であり続けるだろう。

二十世紀、世界で最も知られた日本のクライマーに平山ユージがいる。九七年九月、ヨセミテの高度差千メートルの垂壁、エルキャピタンのサラテ・ルートをほとんどオンサイト(初見)で登り切り、各国のクライマーを瞠目させた。

ユージの活躍は、近年あちこちで生まれた人工壁に集まる若手クライマーたちの成長に貢献している。

ウォールの普及はオールド・クライマーには想像もできないような技術の進歩をクライミング世界にもたらした。トップロープで垂直、あるいはハンクした壁を攀じるその面白さは、少年少女世代にすでに浸透しつつあり、これからの百年の間には、

いまでは想像もできない登山のトレーニング・システムが出来上がるような気がする。

二十世紀終盤の三十年、科学の発達と経済力の向上で登山人たちの行動範囲は大きく広がった。

国内はもちろん、海外の秀峰に直接触れることができるようになり、登山は異文化世界との遭遇の場ともなった。一方で資源確保、観光誘致などの理由で山々が開発された結果、環境問題が浮上した。

そうした中で新しい世紀を迎え、登山の課題の設定方法こそが新しい課題となっていることをつくづく感じる。ごく普通の登山愛好家にとってもそれは同じだ。

百名山に登るにしても、野鳥や花を楽しむにしても、個々人が独自の課題を探して、それぞれの「自由と困難」をひそかに見出す。いわば個性的な登山の時代の到来といえまいだろうか。

個性というものを軽く見たがる日本社会で、それは大事なことでないか、と思う。

日本山岳会のような伝統を持つ大きな組織にとって、新しい時代は少しやりにくいかもしれない。

しかし、個性的な登山を実行、奨励しながら、自然と離れつつある日本の若い世代に魅力あるメッセージを送り続けるなど本気になればできることは多いだろう。

最後に私事にふれることをお許し願いたい。エヴェレスト・スキー滑降が成功した十月七日、筆者は三十六年半勤務した新聞社を定年退職した。その時、当然東浦のことが頭にあったが、毎日登山なんて根性はない。かわりに翌八、九日、この七年恒例としている「奥多摩一周七キロ二十四時間山岳耐久レース」に出て何とか完走した。暗闇の中、ふらふら山道を進みながら、この程度の年齢で現役リタイアはないんだな、と考えた。山登りというのは、そういうことを気づかせる。

根深 誠さんと行く タージリン・ヒマラヤ展望トレッキングと シェルパ史探訪10日間

ヒマラヤの旅と登山を続け、多くの著書がある、根深誠氏同行。ヒマラヤ展望トレッキングとタージリンやカトマンズなどのシェルパゆかりの地を訪れます。■発着地:東京
●4/26発 ¥360,000

ロンボク島・リンジャニ山と バリ島・アグン山登頂 9日間

頂上から雄大な火口湖と海が望めるリンジャニ山バリ島の最高峰アグン山、南海に浮かぶふたつの名峰に登ります。■発着地:東京・大阪・名古屋・福岡
●3/29●4/12●4/26●5/11発
¥268,000~¥318,000

国土交通大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員
アルパイン・サービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪☎06(6444)3033 名古屋☎052(581)3211 福岡☎092(715)1557

平成12年度年次晩餐会 20世紀最後を飾り盛大に開催



右・610名の会員が集い、華やかに開催された平成12年度の年次晩餐会。上・恒例の鏡開きは左から大蔵会員、山本会員、大塚会長。下・新永年会員11名を代表して挨拶する野田会員。



■出席者は六百十六人

平成十二年度の年次晩餐会は十二月二日午後六時から、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館パミール三階「北辰」で開かれた。多彩な催しもあり、二十世紀の最後を飾る盛大な晩餐会だった。

晩餐会には、皇太子殿下が出席されたのをはじめ橋本龍太郎会員ら六百十人の会員が出席。来賓として、日本山岳会のエヴェレスト登頂三十年にちなんで、ネパール王国のケター・バクタ・マテマ駐日大使、アルバータ登頂七十五周年記念事業の成功を祝してカナダ山岳会のマイク・モーターティマー会長ご夫妻、またアルバータ峰登攀隊長を務めたキャメロン・ロウ副会長ら六人をお招きした。

■会長挨拶

成功したアルバータ記念事業

冒頭、大塚博美会長は、次のように挨拶した。

一、特記したいことはアルバータ登頂七十五周年記念事業が成功裡に終わったことだ。カナダ山岳会の熱い心に支えられて合同登山、記念式典、トレッキングとも大成功だった。

一、表彰をふたつ紹介したい。ひとつは第三回秩父宮記念山岳賞で、マツキンリーでの長期気象観測と若い

人たちのマツキンリー登山を継続された大蔵喜福さんの功績に対するもの。もうひとつは、山本俊雄さんに会長特別賞を贈ることにした。チョモランマに六十三歳という最高年齢で登頂された(会報「山」九月号巻頭参照)。いずれもアルパイン・クラブらしい表彰と思う。

一、新しい支部が誕生した。二十五番目になる。福岡支部から分かれて北九州支部が生まれた。初代支部長は吉村健児永年会員。

十一月に実施した会員アンケートは五四・四パーセントの回答を得た。来る創立百周年、また二十一世紀に向けての日本山岳会の長期計画などに反映させていきたい。

■永年会員の紹介

六十人の物故会員に対して黙祷したあと、新永年会員十一人の紹介があった。新永年会員を代表して野田三郎会員は「入会は昭和二十五年。戦争が終わって復学し、荒廃していた山岳部を再興しよう」と関東の大学山岳部が集まった。その時、支援の手を差し伸べてくれたのが日本山岳会だった。現在の学生部につながるものだと思う」と五十年を振り返っての挨拶をされた。

新永年会員

長富修吉(三六・二四)、金澤守恭(三



右・新入会員の紹介。中・フィラム「世界最高峰への足跡」のパネリスト。左・写真展をご覧になる皇太子殿下。(撮影・川島新太郎)



■山本氏に会長特別表彰

第三回秩父宮記念山岳賞と会長特別表彰の表彰式があり、大塚会長が大蔵喜福会員、山本俊雄会員に表彰状を手渡した。続いて、新入会員の紹介に移り、三渡忠臣会員が挨拶した。三渡会員は六十歳ながら、昨年五月、チョー・オユーへの登頂に成功したばかり。二十歳の新人会員とあってもおぼろしい。全国規模の山岳会に魅力を感じ入会させてほしいという山岳会にしていかなければいけないと思う」と語った。恒例の鏡開き。そして渡辺兵力名誉会員の音頭で乾杯し会食に入った。

会食をはさんで全国二十五支部会員の紹介が行われた。新設された北九州支部はじめ、紹介されるたびに会場のあちこちから応答の声が上がった。それに拍手が重なった。静岡支部は支部設立五十周年を迎えた。東九州支部は全国支部懇談会を別府で実施した。来年は石川支部が片山津で開催予定。一段と大きな拍手が巻

き起こった。

■皇太子殿下が写真を特別出品

隣接する慶雲の間では「西暦二〇〇〇年記念写真展―心に映る山々―」が開催された。恒例になっているアルパインフォトビデオクラブの写真展に、広く会員から公募した二十二点を加え七十三点が展示された。昨年に引き続き、皇太子殿下が特別出品された。「アンナプルナ山群・マチャプチャレ」である。山登りを愛好されている殿下は、山行の折に行動とともにした会員らとご自身望んで歓談され、親睦を深められていた。

また招待作品として橋本龍太郎会員、風見武秀名誉会員の作品も展示され、二〇〇〇年記念にふさわしい写真展となった。(晩餐会終了後、作品は地方支部を巡回、まずは山陰支部で伯耆の国山岳美術館で平成十三年一月三日より三月二十日まで開催予定)

一階の瑞光の間では、アルパインプロジェクトの報告会があり、登山、トレッキング、記念式典の様子をビデオで鑑賞。また、第三回秩父宮山岳賞を受賞された大蔵喜福会員の講演があった。マッキンリーでの長期気象観測を始めた動機、意義、苦労話などを、スライドをまじえながら語った。

■フォーラム

「世界最高峰への足跡」

フォーラム「JACが挑んだ世界最高峰への足跡」では、日本山岳会が挑戦した三回のエヴェレスト／チョモランマ登山を、登山隊に参加した伊丹紹泰会員がコーディネーター、平林克敏、湯浅道男、重廣恒夫、山本宗彦の各会員がパネリストとなり、映像を交えて振り返った。

一九五六年のマナスルから十年目を迎えたところから「次はエヴェレスト」という流れになった。ネパール政府の登山禁止などがあり、実現したのが七〇年だった。再開後第一号。南東稜からの登頂に成功したが、南西壁への挑戦が主目標だった。

八〇年は中国側からの登山開放後の第一号。そして八八年は中国の提案による日本、中国、ネパールの三国チョモランマ・サガルマータ交差縦走登山だった。それぞれの時代を象徴した登山だった。平林氏が「最近情報は豊富にあり、装備が整って安易になりがちだが、結果より過程を大切にしていきたい」と発言するなど、二十一世紀での活躍を展望して締めくくった。

翌日の懇親山行は、千葉県・富山で行われた。

(写真・村井葵、文・高橋重之)

第三回秩父宮記念山岳賞の表彰

副会長・竹内哲夫

第三回秩父宮記念山岳賞は、大蔵喜福氏の「マッキンリー通年気象観測の成功とそれを通じての若手登山者の育成」に授与することが決定し、去る十二月二日の年次晩餐会で会長から表彰状と副賞金二十万円を添えて表彰式が行われた。

本賞の選考を行うため、審査委員会は三件の候補業績の中から、数回にわたる委員会の審議の結果、本業績が最も授賞にふさわしいとの委員全員の一致した結論により、木下是雄審査委員長から会長へ推薦し、十一月八日の理事会で決定を見た。

◎表彰に値する業績は次のとおり。

一、登山者の立場から極寒の高山における烈風の実態を突き止める必要を認識して、マッキンリー(一九四メートル)の山頂近くに、通年稼働の無人気象観測・自動記録装置を設置した。この装置の設計は、風の観測に重点がある。

二、装置の保守・交換のための登山は、事実上年一回に限られる。第一次(一九九〇)〜第四次(一九九三)の登山で設置した装置には越年中に破損・故障が起こったが、

改良を重ねた結果、第五次の設置以降のものは順調に働き、第十次までの観測記録が得られた。

三、毎年の保守・交換のための登山を通じて若手登山者を育成し、有為の人材を育て上げた。これらの毎年次登山はすべて無事故裡に完了した。

以上が表彰された業績の概要であるが、設置された観測機器は、アラスカ大学の「国際北極圏センター」に引き継がれ、分析と同時に機器の性能を高め、気象台、デナリ国立公園に人工衛星経由で送信され、即時継続的に登山者に役立たせるよう計画が進められている。

また大蔵氏は、十一次にわたるマッキンリー登山に当たり、現役学生延べ三十八名を含む七十八名の主として若手登山者を同行し、氏のリードによる登頂を果たしている。これらの若手はその後、ナムチャバルワのほか、数次の日本山岳会をはじめ、大学山岳部などの海外登山に極めて大きな役割を果たす結果をもたらした。

なお、年次晩餐会での表彰に先立

ち、当日別室で、大蔵氏自身から今回の表彰業績についての発表会があり、多数の聴講者におおきな感銘を与えた。

激励は新たな出発日に



秩父宮記念山岳賞の大蔵会員

ミレニアムの年次晩餐会において、榮譽ある秩父宮記念山岳賞をいただき、大変光栄に思います。

すでに二十年近く前になりますが、先輩の加藤保男さんが冬期エヴェレストに向かうとき、何が一番問題か話したのが、このマッキンリー気象観測登山の、そもその始まりでした。「寒さより風だね」という危惧が、その後現実になってしまったこと、そして植村直己さんや、一緒にヒマラヤを登った山田昇さん、小松幸三君、三枝輝雄君らの悲劇が、大きな後押しとなりました。

まさか十一回も続くとは、私自身が一番驚いています。継続は力といいますが、継続させてくれた日本山岳会の存在そのものがあったとい

大蔵喜福

感謝しています。ですから、すべての会員に厚くお礼を申し上げます。

さて、十年ひと区切りで榮譽をいただきましたが、私は授賞日が新たな始まりの日と理解しました。研究はまだ終わっていません。今後、気象観測はアラスカ大学国際北極圏研究センターに引き継いでもらえることになり、一緒に活動していく予定ですが、これからの研究の行方と私自身の生き方をも問われる出来事と肝に命じています。

マッキンリーの十年は、私を支え、育ててくれた仲間たちがいなかったら達成できませんでした。最大の感謝はマッキンリーの山仲間七十余人に捧げたいと思います。

*報告論文(マッキンリー気象観測機器設置登山隊「全十一次におよぶ登山記録と学生等青年隊員の総合的登山能力育成の報告」発行「科学委員会マッキンリー気象観測プロジェクト A4判一七八ページ 頒布価格二千円」については事務局へお問い合わせください。

報告

REPORT
1月

科学委員会・自然保護委員会

シンポジウム「登山者の立場から
山のトイレ問題を考える」

本シンポジウムは環境庁、(社)日本山岳協会、山と溪谷、岳人、日本トイレ協会、HAT・Jの後援をいただいて、十一月二十五日(土)十三時三十分から十七時三十分まで、千代田区飯田橋の東京都高年齢者就業センタ―(シニアワーク東京)の講堂で行われた。心配された集員も、両委員会委員の努力で定席百二十名のところ百三十八名の参加があり、補助席をつくる盛況だった。基調報告、基調講演とも各方面からの人材を得て、広く深い見識の意見発表となった。

定刻、総合司会小西奎二委員の挨拶で始まり、竹内哲夫副会長の開会の辞で幕をあげた。基調報告は科学委員会担当の森武昭理事が、山のトイレを考える上での現状解析と問題提起・改善へ向けた動き・その中で

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

の登山者の役割を順序立てて明瞭に分析し、登山者の意識改革とマナー改善にかかる合意形成が大切とわかりやすく発表(この発表の要旨は会報八月二六六三号巻頭記事参照)。続いて織方郁映科学委員が山のトイレ使用判断の一助として、技術面から設備ごとの概要と特徴を説明した。

基調講演では行政の立場から環境庁自然保護局の徳丸久衛氏が、現状改善の努力と登山者への要望として、スイス視察の体験から自己責任を問題提起。山小屋経営者の立場から燕山荘オーナーの赤沼健至氏と富士山のトイレ問題に取り組むエコ・トイレ勉強会会長宮崎善旦氏の両名が、現場からの声を発表。赤沼氏は尿は毒物や廃棄物ではないという視点で、オーバーユースと騒がしいが、所によつては自然浄化能力が果たされている。適材適所な考えでよいとした。宮崎氏は富士山という特異な条件下での問題点と取り組み状況を

説明した。

パネル討論会は筆者の司会で、基調講演者の他に、ツアー登山業の立場から斎藤友子氏、ジャーナリストでHAT・Jの北村節子氏、山小屋のトイレ問題のキャンペーンを張った信濃毎日新聞の斎藤隆氏の三名がパネリストとして加わり、意見発表。

斎藤友子氏は環境配慮型のツアー(観光)登山を目指す客への指導啓蒙などについて、北村氏は自然保護団体HAT・Jのトイレへの取り組みを実際の行動を例に、ペーパー分別の徹底及びトイレ問題を教育問題として捕らえるアイデアなどを説明した。斎藤隆氏はキャンペーンその後の感想として、山登りの営為は人の内面と深い繋がり(尊厳)がある。大量な排出行為は自然を侵す一つの行為、傷つけられる側にあるのは山の尊厳。この二つの尊厳から排出者責任も考えようとした。

トイレ問題への危機感、有料化問題、どんなマナーが必要かなど意見交換の後、会場からの発言について質疑討論を行った。その中で、山小屋や公共トイレといった施設有りのケースだけでなく避難小屋や全くの自然の中での排泄問題も掘り下げて欲しい、過剰なインフラとの比較論、焼却や搬送に係わる新たな環境問題、山での排泄についてのマナーの徹底

など、非常に有意義な意見が多数あった。

これらの意見を集約して司会役の筆者が、「ソフトを考える上にハードを学習し非常に役立った。しかし、人間にとつて快適なトイレばかりを究めるのではなく、何のためのトイレ問題かを基底に議論を進めないと道を誤る。環境に過度な負荷をかけない前提は絶対崩さないで、行政(設備)、山小屋(維持管理)、登山者(維持費用負担とマナー)が三位一体となつて合意形成のために分担努力をお願いしたい」と参加者個人個人の実行と周囲への啓発を訴えた。

最後に、自然保護委員会担当の河西瑛一郎理事が閉会の言葉を述べ、定刻に終了した。

(自然保護委員会委員長 大蔵喜福)

自然保護委員会

二〇〇〇年度全国集会

今年度の全国集会は、十月十四日(土)、十五日(日)の両日、福井支部の協力を得て、荒島岳山麓、福井県大野市扇屋旅館で開催された。テーマは「百名山ブームが自然環境に及ぼす影響について」で、地元荒島岳など、登山道、お花畑の荒廃が進む各地の百名山の現状を話し合った。参加は環境庁、県や市の関係者を始め各支

部より熱心な会員など、総勢百名が出席した。

十四日午後一時半、大蔵委員長の司会で開会。竹内副会長が「登山道の荒れは登山者に直接関わる問題。会の活動の柱である自然保護の訴えを全国に発信したい」と呼びかけた。

宮本数男福井支部長の挨拶のあと、第一部は各支部代表が現状報告。大山Ⅱ山陰、大台ヶ原Ⅱ関西、御在所岳Ⅱ東海、早池峰Ⅱ本部委員会、荒島岳Ⅱ福井、と続き、白山Ⅱ石川、阿蘇山Ⅱ熊本、富士山Ⅱ静岡の資料が紹介された。充実した内容で時間が足りなかったことが惜しまれた。

第二部では環境庁自然保護局計画課中島慶二氏が「登山道整備に関する調査」について発表。その後、オーバーユースによる被害の問題点について質疑ならびに意見陳述に入り、活発な議論が交わされた。資料なども含め、わかりやすいと参加者の評価は高かった。

夕食時の懇談会はこちらで助力いただいた大野市前田佳一助役の挨拶で始まり、参加者一同大いに懇親を深めた。

翌十五日は福井支部の皆さん、福井県自然保護センターのご協力を得て、荒島岳登山と自然観察会を楽しみ、無事終了。つづがなく日本山岳会自然保護全国集会を閉会した。(詳しくは今後発行の『木ノ目草ノ芽』42

号をご参照ください) (大蔵喜福)

山研運営委員会

焼岳登山とミニ水力発電見学

十月十三日、新島々からバスで釜トンネルを抜けると、目の前に焼岳、その裾のほうは黄金色、頂上の茶褐色から笹原の緑、樹林帯の赤、黄、濃緑の錦に息を飲んだ。九州に住む私には初めての秋の上高地である。大正池でバスを降りて梓川畔の散策を楽しみ、四時頃山研に着いた。

十四日は焼岳登山。早朝着組も集合。三班に分かれて七時十五分に山研を出発した。私はピスタリ組。天気は上々、見上げると高く伸びた黄色い葉の上には羊雲と青い空が美しい。七時四十五分、焼岳登山口。しばらくは緩やかな樹林帯を歩く。山道は少しづつ険しくなり、梯子を二度ほど登って大正池の見える岩場で休息。長い梯子を登ってしばらくすると、道は笹原をジグザグに登り、十時五分焼岳小屋に着いた。この峠から十分で焼岳展望台。雲の中に浮いたような笠岳がすぐそばに見え、焼岳も手が届きそう。しかしこれからが大変で、登っては休み、登っては休み、一時間半かかって十二時五分に山頂にたどり着いた。すぐ前に新穂高ロープウエーの西穂高口の

駅、右手には西穂山荘、その北のほうに穂高連峰が槍ヶ岳へと続く。南東には南アルプス甲斐駒、北岳、その向うに富士の姿が……。手前の山々は濃緑の中に赤、黄、オレンジ、笹の光った緑、自然の織り成す秋の錦は見事だった。

十二時四十五分、ピスタリ組が先頭で峠の小屋まで下り、三時五十分登山口。予定より遅れたため上高地温泉ホテルでの入浴は取りやめ、四時半頃山研に着いた。

山研委員会の坂本さんの料理の腕前はすこく、六時過ぎに始まった宴会は非常に楽しいものだった。

十五日は八時二十分から二班に分かれてミニ水力発電の施設見学である。山研の裏にあるミニ水力発電実験棟を、山研の木村さんの説明を聞きながら見学した。落差五〇メートルの善六沢から導水管で水を引き、ペルトン水車を回して発電。発電後の水は一部山研の飲料水として使用し、余った水は梓川へ放流するそう。電力は最大一キロワットをオーバーする。説明後、五〇〇メートルほど離れた水源に向かう。笹の茂る道を少し歩くと大きなカツラの木があり、その先が善六沢。しばらく沢沿いに歩くとサージタンクがあり、三〇メートルほどで取水口である。ここから一・五インチパイプ六本で

取水。導水された水はドラム缶を使ったサージタンクの下部で砂抜きをし、三インチパイプで五二メートル下の発電実験棟に導水する。ここで砂抜きの大変さを実地に見せてもらった。

ミニ水力発電は、神奈川工科大学の自然エネルギー利用研究グループの鳥居、森岡教授の発電施設構想に始まり、神奈川工科大学と日本山岳会との共同研究に至った背景、関係諸官庁へ日参した話、さまざまな紆余曲折の後、一昨年十一月二十二日に試運転に至ったことなど、事を始める大変さをつくづく思った。

その後ビデオによる各山小屋の自

北アルプス白馬連峰

白馬五竜スキー場直下

スキーツアー、雪上訓練、クロスカントリー、スノーシューによるスノートレッキングにご利用ください。

和牛料理の宿

 ひまわり

長野県北安曇郡白馬村神城22114-17
TEL (0261) 75-2292(代)
FAX (0261) 75-3284

11月より滑走可能
リフト割引券あり

然エネルギー利用状況、水力発電利用の利点、特徴の説明、現在山研の発電は生ゴミ処理、照明に使用されていること、また今後の水力発電のための実験データ集め、し尿問題解決のための利用法研究など、実りある勉強会だった。

天氣に恵まれ、山よし、木村夫妻よし、感謝感謝の二日間だった。

なお、山研の地下で催されていた「心に映る山々」の展示に、去年七月大姑娘山に同行した奈良千左子さんの『白雲路・中国日隆』の写真を見つけ、懐かしさに感激。山研での楽しさが倍増した。ありがとうございました。

(鶴田佐知子)

三水会

創立二十五周年記念式典・山行

三水会は、創立二十五周年を迎え十月十九日に東京・神楽坂の東京都教育会館エミールでお祝いの集いを、また二十一日には飯能・天覧山で記念山行を行った。

お祝いの集いには九十三人が参加、大塚博美日本山岳会会長らをお招きして盛大に行った。木村俊博代表は「並々ならぬ苦勞をされてこられた諸先輩、またご支援を賜った多くの方々に感謝したい」と挨拶、片岡博会員への感謝状授与、記念撮影など



三水会25周年記念の天覧山登山に46名参加

のあと、川崎精雄名誉会員の音頭で乾杯し、にぎやかに懇親を続けた。

かつて日本山岳会に東京支部があったころ、会員の交流の場として三水会があった。東京支部が解散したのち、これを復活しようという話を持ち上がり、新たな三水会が発足した。以来二十五年を経た。この間、第三水曜日になるとルームに集い諸先輩を講師として招いては山にまつわる話を聞き、また会員相互の懇親を重ねてきた。現地集会としての山行も続け、これら例会・現地集会は四百十回を超えるに至った。会員は約二百人。

二十五周年の記念山行は、全員が参加できるようにと、多峰主山から

天覧山までの、なだらかな丘陵を歩いた。反省会を飯能で実施。当然のことながら話題の中心は、これまでの例会・現地集会。この日はかりは、と参加した会員も多く、旧交を温めた。四十六人が参加。

記念誌として二十五年のあゆみを刊行、またパンダナをつくって全員に配布した。記念誌には、三水会の活動を記録、例会での講演要旨を掲載するとともに、会員それぞれが「三水会と私」というテーマで投稿、あくなき山への情熱を綴り、記録として残した。

(高橋重之)

92同期会第十一回山行

鶴力鳥屋山(つるがとやま)

鶴力鳥屋山とは読みにくい名前ですが、東京近郊に残された数少ない静かな山ということで、今回はあえて登山対象として選びました。十月二十八日、総勢十五名が曇天の笹子駅に降り立った時には三、四人のそれらしい人が目撃されたのみで、静かな山を予見させるのに十分でした。

船橋沢に沿ってすぐに直登、途中で林道を横断して三時間余で頂上に到着することができました。林道に至るまでは右に左にと沢を渡ることになり、晴天統きの時には問題ありませんが、降雨後などは難儀すること

とになるかもしれません。

この山は甲府盆地を西に望み、東西に長い稜線をもつ標高一三七四メートルの山で、豊かな灌木樹林帯がせりあがって、頂までを埋め尽くしています。このため尾根に取り付いてからも、眺望は良好とは言えませんが、さまざまな種類のカエデを尾根筋、とくに北斜面に数多く見出すことができます。折からの紅葉シーズンを迎え、見事な彩りで、訪れる登山者の目を楽しませてくれます。

うわさの通り、秋のシーズンの休日にもかかわらず、登山者とすれ違うことは稀で、都心に近いところにひっそりとしたたずまいの、樹種の豊かな山が残されていることに不思議な気がしました。野鳥が多いのにも驚かされます。人の手の入らない山は、動物たちが日々の営みを続けているのに十分な餌が確保されているということなのかもしれません。目を凝らすと、下草が豊富なのと、さまざまな色の木の実がそれぞれに熟して彼らを招いているのに気づき、なるほどと納得がいきます。

下山地の初狩駅では恒例の打ち上げパーティーを開催。その席で97同期会山行計画への参加(十一月、懇親会開催(十一月)、炭焼き大会(今春)など、当面の活動計画が具体化されました。

(石田俊雄)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

天然のブナ林が自生する 竜ヶ森に集う

平成十二年十月十五日(日)、タツ年生まれの会員の慶祝と、支部会員の親睦を兼ねた「タツ年記念山行」を実施し、十八名が参加した。

この竜ヶ森(標高一〇四九メートル)は数少ない県内の千支にちなむ山として人気があり、この他に「竜馬山(秋田県本荘市)」の名が知られる。竜ヶ森は隣接する鷹巣町、森吉町と境をなし、四つのコースが頂上を目指す。首都圏と違って、わが故郷はほとんどの山行は自家用車の乗合が唯一の交通手段である。不便ではあるが、過密、過剰な登山行動がない分、豊かな自然がいままで残

るほうがよい。

さて今回は、最近、登山口のある比内町が町おこしの一環に整備した「最上コース」をたどることにし、タツ年の幹事佐藤(税)会員自ら役場に照会するなどして選定した。比内町には南北朝期、当地方一帯を治めた浅利氏の居館・独鈷城跡や、近世まで繁栄した大葛金山など、史跡の町にふさわしいたずまいが残る。

登山口までの林道も緩やかで路盤は良好とはいえないが、特に危険箇所もなく順調にいける。ただ、大雨や一冬越したあとは落石などの恐れがある。少しきつめの登山口を出発すると、すぐ緩やかになって一息入れると、最上沢に沿った路が稜線を目指している。天候は晴れ、風はなし、足元は乾いていて適度な傾斜、絶好の登山コンディションである。みんなの足取りもいづになく軽い。紅葉が山頂まで覆っていて、ぜいたくな慶祝登山になった。見方によつては竜の頭にも見えるフジの奇木にも歓声があがった。

十一時三十分山頂着。展望台が新調され、避難小屋も立派に改装されていて、眼下の風景が一望できる。今日の眺めは格別だった。

全員がそろったところで昼食を兼ねてささやかな祝宴となり、時間を三十分ほど延長したが、ほぼ予定通

りの登山口到着となった。帰途、工事中の国道で渋滞にあい、突然バケツをひっくり返したような雨に見舞われながら、今度は予定を大幅に遅れてそれぞれの家路についた。

(鈴木要三)

山形支部

秋晴れの神室山へ

支部公式行事の秋の山行は、昨年十月七、八日、神室山登山を楽しんだ。

神室山(三六五メートル)は栗駒国立公園の最南に位置し、奥羽山脈のほぼ中央、山形、秋田の県境にある。神室連峰はこの神室山を起点に南西方向に小又山、火打岳、大尺山、空蔵山などの峰々を連ねる。山群の地形は、東西の斜面が非対称の特色がある。西側の日本海側は緩斜面、東側の太平洋側は融雪により切り立った急斜面の断崖である。二〇数キロにおよぶ稜線の縦走路は、刀刃峰かたばなみねともいわれるやせ尾根からなり、さえるものない景観は、訪れる岳人を魅了してやまない。

今回のコースは金山町有屋口から

入り、神室山頂避難小屋一泊、下山は新庄土内コースをとった。秋の大型連休、諸行事のため参加者は減ってしまったが、JAC首都圏会員の滑志田隆氏(毎日新聞山形支局長)の特別参加もあり、楽しい山歩きだった。天気予報は晴、八時三十分新幹線新庄駅集合、金山町有屋登山口まで車で移動して入山。山麓は秋も末だ。高度を上げると秋色を増し、稜線上は紅葉が見頃の山頂に着く。三六〇度の大パノラマ、鳥海山、月山、奥羽山脈の山々、遠く日本海まで見える。

問題は今日の宿泊予定地の山小屋で、予想通りの超満員。定員三十名に五十余名、床に、テントに、寝るのが精一杯。したがって夕食は満天の星空の下、登山途中に収穫したきのこの料理に一般の岳人も加わり祝杯、楽しいひとときであった。

翌朝、神室縦走に挑むほとんどの岳人は、早朝四時頃起床、三々五々出発。私たちは山小屋の清掃を済ませ、土内コースを、ゆっくりきのこの探りながらの余裕下山。天候にも恵まれ、またとない秋山を楽しむことができた。

(菅原富喜)

今年もさげしで会いましょう

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



ベック・ウェザーズ教授に会ったこと

伊藤寿男

ベック・ウェザーズ教授をご承知だろうか。例の一九九六年五月のエヴェレスト大量遭難の時、サウスコルにおいて二度にわたって仲間に見捨てられ、翌日自力でサウスコルのテントに辛うじて辿り着き生還した男である。この男に思いがけない場であつたのでご披露したい。

六月末BOMA (Building Owners and Managers Association) の総会がサン・ディエゴで開催され、私も日本のデレグレーションの一員として参加した。私は知らなかったが、この総会のオープニング昼食会の目玉として彼の講演が設定されていたの

である。

講演の内容は私のヒアリング能力不足もあり完全には理解できなかったが、既に読んでいた本(『空へ』—文芸春秋社「EVEREST」- National Geographic社)、その他の記録などから補足するとおおよそ次のような



ベック・ウェザーズ教授と筆者

ことを話していた。

一九九六年五月十日未明、快晴の絶好のアタック日和の下、サウスコルよりロブ・ホール隊長に率いられた公募登山隊八名がエヴェレスト頂上を目指した。

他にも数パーティーが同時に頂上を目指しており、ルート待ち、体調の好不調、技術の差などありバラバラになりながら、日本人女性難波康子を含むパーティーのうち三人がどうにか頂上を踏んだ。

午後三時過ぎより突然天候が急変しサウスコル上の第4キャンプへの下降は、強風雪、視界ゼロの中で難渋を極めた。全員ちりちりになったが、ベック・ウェザーズと難波康子の二人は、他パーティーの疲労困憊の連中と合流して烈風吹きすさぶサウスコルになんとか降り立った。

しかし猛烈なブリザードでテントの位置がわからず、遂に彼らは力尽き動けなくなってしまう。第4テントからほんの十五〜二十分の地点である。

別の公募隊のガイドであるロシア人ブクレイエフ(超人的な体力の持ち主。その時全力を尽くして救助しなかったと非難され、後日『デスゾーン八八四メートル』(角川書店)で反論している。翌年アンナプルナ

で遭難死した)は、その夜二度にわたり単身で捜索に赴き、二度目に雪上にへたりこんでいる弱者グループを見つけた。この時点でブクレイエフはベック・ウェザーズと難波康子の二人は死んでいるとみて、彼のパーティーのメンバー二人をひとりずつ二往復してテントに連れ帰った。

翌朝ブクレイエフの話を聞いて、ロブ・ホール隊長のメンバーが老練シエルバを連れて残された二人を確認に行つたところ、両手両足を突き出し雪に覆われている二人を見つけた。顔面に張り付いた氷を剥がすと驚いたことにまだ二人は生きていた。しかしもう虫の息であり、他の多数の生存者を無事に下ろすために二人は神の手に委ねよう」と言う老練シェールバの意見に従って断腸の思いでテントに戻った。

ブリザードは一日中続き、生存者達はサウスコルのテントに閉じこめられていた。その日の夕方、ゾンビの如きベック・ウェザーズが独力でテントに辿り着いたのである。

一昨年の正月であつたか、偶然つけたテレビの画面に、水泳パンツ姿の男が透明な水槽の中で腹まで水に漬かって、水流の中を懸命になつて歩行訓練を行っているのが映し出された。

ウェザースであった。右手は義手、顔は凍傷でひきつれ、鼻にはちょうどソーセージのごとき肉塊がぶら下がっていた。尻の肉を移植したのである。TVのインタビュで難波康子の話になると彼は絶句し泣き出した。

私はエヴェレスト登頂の大きな代償を痛感し、うちひしがれた彼のことが妙に印象に残っていた。

広い会場の中で彼はスポットライトを浴びて丸々二時間、舞台中を動き回って汗だくで講演した。彼の鼻は見事に整形され胸板も厚く、かつてTVで見たうちひしがれた様子は全く感じられずむしろ生気が漲っていた。

何回も難波康子の名前が登場した。すがりついた彼女の手の力が次第になくなっていくの思い出すとか、救ってやれなかったことに自責の念耐え難い等々切々と訴えた。最初さわめいていた会場も最後にはしんとして聞き入っていた。講演が終わると万雷の拍手が鳴り止まなかった。私は舞台近くに座っていたので舞台を降りてきた彼に握手を求め、あらまし次のことを言って彼を称えた。一、難波康子を最後まで面倒見てくれたことに日本人として感謝する。二、強靱な体力と不屈の精神力に敬

意を表する。

三、二度にわたって仲間に見捨てられたにも拘わらず何の恨みつらみも公式の場で表明していないのは立派である。

彼は義手の右手と指のない左手で固く私を抱き、よく言ってくれたと何回も謝意を表したのだった。

後刻、彼の著書のサイン会があった。所用を済ませて私が駆けつけたときには、本の在庫が尽きサイン会は終了したところであった。その場に残っていた彼に後日サインして送ってもらうことにした。帰国後事務局から「確かに承っている。出版社から入手次第送付する」との来信があった。

本の題名は『Left for Dead』、入手を楽しみに待っているところである。

(参考)

1 遭難時の状況は『Into Thin Air』邦訳『空へ』(文芸春秋社)に詳しい。著者はアウトドア雑誌社から顧客の一員として本公募隊に派遣された。山のベテランであるだけにドキュメンタリーレポートとして大変面白い。

2 この時期ロブ・ホール隊のほか同じく公募隊で彼の親友のエド・フィッシャー隊、IMAX隊、南アフリカ隊、台湾隊、など数パーティが

BCに入っていた。同時期、ノースコル・ルートには日本の九州隊、インド隊も入っており、インド隊に九州隊が非難されたケースはご記憶の方もおられるだろう。(後にインド隊の誤解であったと判明した)

3 IMAX隊の撮影した映画がIMAX方式で後日公開され見に行った。

巨大画面(縦方向に長かったような気がする)に映し出されるエヴェレストに圧倒されたが、同時に、体力も酸素も残っているにもかかわらず、公募客のためにサウスピークに残りそのまま死に至ったロブ・ホール隊長と、BCとの電話による生々しい対話がオンエアされ印象に残った。

BCの呼びかけに酸素もなくなり次第に弱っていくロブ・ホールの声、通信衛星によって、ニュージールランドに残された身重な夫人と直接交わされた最後の会話などがそのまま放映されインパクトの強い映画であった。

4 IMAX社の撮った写真はNational Geographic社より『EVEREST mountain without mercy』として発刊された。大量遭難事件も触れられており遭難死した台湾隊メンバーの遺体など生々しく写っている。

*本稿は京都大学文学士山岳会会報『News Letter』十月号より転載したものです。

チリのタアパカ火山に登る

中島道郎

昨年の十月一日、チリのアリカ市で開催された「第四回登山と高所環境生理学に関する国際会議」(その第三回は一昨年の松本市)に参加したついでに、会のエキスカージョンに加わって、海拔五八二四メートルの火山、タアパカ(Taapaca)峰に登ってきました。

この国の観光資源はすべてペルー、ボリビア、アルゼンチンとの国境付近にあります。ですから、他国のように、国境付近は外国人立ち入り禁

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.

つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600

黄銅色メタリック ￥18,000 消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ

〒177 東京都板橋区上石神井1丁目37番13号

TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

止としたのでは、この国の観光事業は成り立ちません。さりとて、観光と称してやたら外国人がウロウロしてくるのも困る、そこで、軍そのものが観光業者になれば観光客を管理し、外貨もたっぷり稼ぐことができる、といっわけ、123ENTELという会社が観光客を誘致し、実際は軍が運営する、という分業が成立していました。ただしこれはチリ北部の一部的な事情かもしれません。

さて、その実際ですが、一行は私を含めて七人、十月四日、学会場から軍のバスで、海拔四五〇〇メートルにある世界一高い湖、チュンガラ湖を観光し、三六〇〇メートルまで下り、Putreという村の駐屯地にある陸軍病院に泊まりました。陸軍病院はいったん緩急を想定して作られていますから、平素はガラガラです。それを観光客に提供すれば一石二鳥です。

翌五日は、朝食後われわれの世話係グテレス中尉の案内でそのあたり四〇〇〇メートル付近を三時間ばかりトレッキングして高所順応。登山装備は軍が一切合財ガイド料込みで貸与してくれまので、日本からは何の準備も無用です。私はアイゼンと二本杖を借りました。

明けて六日、午前三時起床、四時トラックで出発、四五〇〇メートル

地点で下車、五時登山開始。十一時、五四〇〇メートルから先は雪田となる。このあたりの雪は解けずに昇華するばかりなので、雪面は平らでなく、櫛の歯のように尖って立っており、この櫛の刃渡りの登攀に疲れました。このとき二本杖が威力を発揮しました。これがないととても登れません。

午後三時十五分、山稜に立つ。登った、と思ったらそこに中尉が待っていて「ドクター、あと高度差二〇メートル」という。長い稜線の果てに国旗がはためているのが見える。あそこが三角点か。中尉が荷物を持つてくれる。空身でもなかなか進まない。先行していた若い仲間たちがわざと歩度を落として私の通過を持つていてくれる。ありがとう。三時四十五分、着いた、五八二四メートル。グラシエス！グラシエス！同行者一人ひとりに感謝の言葉を述べる。中尉が持参の軍のベレー帽を私の頭に載せてくれる。これをかぶって皆と記念撮影。

四時十五分、もう一刻も猶予がない。さあ急げ、陽の暮れないうちに下山完了しなきゃ！櫛の歯雪を蹴散らしながら下る。下りでもなかなか進まない。腹はペコペコ、口はカラカラ。六時四十五分、陽は太平洋の彼方に沈む。いやあ、この夕陽のきれいなこと。茜雲。陽が暮れる

ぞ、急げ、急げ、誰かがまた荷物を持つてくれる。でも、それが誰だかもうわからない。七時四十五分、氣息奄々として車にたどり着く。

八時三十分で3600駐屯地帰着。軍のバスでアリカ市のホテルに帰りついたのは十月七日午前十時、何とこの日は二十一日間行動したのでした。この国は、全く登山の用意なしで行っても登山はできます。申し込み窓口は123ENTEL (注: <http://www.entelchile.net>)、実際はチリ陸軍が一切世話をします。ちなみに前記の登山料は、チュンガラ湖観光も含めて、US\$二一〇でした。

カナダ山岳会名誉会長 ボブ・ハインド氏を偲んで

斎藤健治

昨年六月二十六日、カナダ山岳会名誉会長ボブ・ハインド氏のマジョリー夫人から、「夫のボブが八十九歳の誕生日を迎えたその翌日の六月九日に亡くなりました。今はこれ以上何も書けません」との簡単な悲しい便りを受け取った。一昨年のクリスマス、マスの夫人からの便りには、「私どもも長年住み慣れたところから今度のマンションに移りました。そしてボブは二度目の赤ちゃんになりました

た」とあった。あんなに元気だった彼も老齢には勝てないのかと、自分の年齢を考えながらため息をついた。ボブ夫妻との出会いはもう二十年近い昔、カナダ山岳会が例年企画する夏季の催しに二週間ほど、日本からたった一人で参加した折だった。キャンモアのクラブ・ハウスに一週間宿泊まりしてパンフの近くの山々で予備訓練した後、セルカーク山群に移動してバガブー峰を中心にした山々に登った。

そんなある日、登山の中休みに一日バガブー峰を回るハイキングにハインド夫妻とアメリカ婦人一人を加えた四人で出かけた。既に七十歳に近いと思われるボブは、小柄な口数の少ない温厚な人柄と見たが、なかなかの健脚であった。

氷河を一時間ほど登ってバガブー峰の裏側に出る。それからゴツゴツした岩道を渡り歩く。その傍らにバガブー峰が天に向かって垂直にそそり立つ。首が痛くなるほど見上げても頂は視界に入らない。それから二時間ほどして、上から眺めるとコバルト色に見えるコバルト湖岸に着く。湖の水は氷河から流れ出るあの白濁した水と違って水底まで透き通って湖底の岩がキラキラと光り、コバルト色はどこかに消えていた。

その湖畔で本会の三田元会長を思



ひとくちインターネット・3 プロバイダとは？

インターネットは世界中のパソコン相互を電話回線やケーブルTV網などを利用してデータを送受信している(基本的に)。このデータは行き先、発信元の情報を持って通信網に送り出されるが、いわばこのデータを荷物のよう仕分ける役目をするのがプロバイダという接続業者である。値段やサービスはまちまちだが、この通信料の低(定)額化が最近の話題となっている。プロバイダにつなぐための電話代は別にかかる。(N)

わせるボブと親しくなった。彼ら夫妻は数年前に日本に來遊したことがあり、楽しかった思い出話などを聞いた。それから名も知らない高山植物の咲き乱れるメドウの道なき道をたどり、きれいな水がほとばしる小さな滝を横切ったりしながら、いろいろな話をしたと思うが、もう記憶にない。銀髪のマジョリー夫人も元氣そのものであった。(会報「山」四五五、四五六号参照)

私に帰国した翌年の一九八三年九月、「アンナ・ブルナ・トレッキン」へ行く途中、東京に立ち寄るのでよろしくとの便りがボブからあった。夫妻は同僚一人と十一月一日成田に着いた。その翌日の夜、私が三人をわが家に案内した。当時の佐々会長をはじめとする佐藤テル名誉会員、今は故人となられた三田幸夫、吉沢一郎、田口二郎の各名誉会員などが歓迎した。(「山」四六三号)

その夜、三田元会長はハインド氏らに一九二五年に初登頂されたマウント・アルバータの思い出話をされた。その後二十三年を経て第二登を果たし、日本隊が山頂に残してきたピッケルを記念に持ち帰ったアメリカ人二人、オバリーンとアイレス両氏が後日送ってきた二人の名入りのピッケルをお見せしたりした。彼らを送ってきたピッケルは完全無欠なものであったので、その頃は誰一人、彼ら二人がアメリカに持ち帰った日本隊のピッケルが石突を山頂に残して折れたものだとは思ひもしなかった。そして山頂に残されていた石突が、その後登頂に成功した長野高校山岳部が持ち帰っていたとは。

昨夏、日カ山岳会合同でマウント・アルバータ初登頂七十五周年記念登山が行われ、あわせてアメリカ山岳会に保管されていた件のピッケルがカナダに移り、上下に分かれていたピッケルの合体式も行われた由にて、まことに同慶にたえない。

もしハインド氏が健在ならば、おそらくその式典に参列されたことであらうに。ここに在りし日の氏を偲んで日カ両国山岳会の友好親善のま

すます盛んならんことを願うものである。

ネパールにおける最近の マオイスト集団の活動

大関 保

この数年ネパールでは、いわゆる一九九〇年の民主化以後台頭してきた、マオイストと呼ばれる毛沢東主義を標榜する極左反政府組織(構成人員は未知数)の活動が活発化していたが、特に最近はその動きが激しくなっている。昨年九月から十月末にかけてネパールに滞在していたので、知り得た現状をお知らせしたい。

昨年九月以前の在ネパール日本大使館からの発出評価では、ネパール中西部でマオイストの活動が活発化しており、スルカット、ピュータン郡は危険度3、ジウムラ、ドルパ、ダング、ダイレク、パルディア、パダンケ郡は危険度2、西部のポカラを除くラムジュン、タフナー、パルパット、バグルン、グルミ、シャンジャ、カスキ郡は危険度2になっていた。(ちなみに危険度4は、外国人家族などは当該地域より退去、危険度5は国外脱出となる)。

九月に入ってから、特にネパール中西部でマオイストの活動が活発化

している。村の要人、パンチャヤット幹部の暗殺、非共産党幹部の暗殺、警察関係、政府関係施設への襲撃のみならず、今まで襲撃対象としていなかった外国人や登山隊までが襲われるようになってきている。

たとえば九月三日、スペインのマナスル遠征隊がアルガート・パザール近くで、キャラバンに囲まれ、金品を強奪された。その時、幹部らしき数人が進み出て、「われわれの趣旨に賛同するように」と求められた。身体検査はもとより、個人装備を納めた樽、ザックなども徹底的に調べられ、金、カメラ、時計、高所用衣

日帰りからキリマンジャロ、マッターホルンまで

全国ネットの山旅専門店!
安全で快適な山旅を。中高年から一人様までサポートします。各コース経験豊富なツアーリーダー同行で安心。
おすすめオリジナルプラン手配OK
人気の山旅スタイル。気軽にお問合せください。

**2000年秋からの
やませみクラフスタート**
大好評! 初心者の方の山歩き講座。各地発着のプランをご用意しました。
**2001年度カタログも
ご予約ください。**

アミューストラベル株式会社
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエビルB1
TEL 03(5325)1256 FAX 03(5325)1258
大 阪 06(456)3366 名古屋 052(588)5617
福岡 092(414)5566 広島 082(502)2525

服に至るまで奪われ、クライミングシエルバからも金品を強奪したそうである。このためスペイン隊は遠征中止を余儀なくされたという。

外国人が多数のマオイストに囲まれ、脅迫、金品の強奪を受けたのはこれが初めてだそうである。しかし、こうしたことは必ず第二、第三の例を生むことになるであろう。幸いにして日本人は今のところ襲われてはいないが、今後同様の状況が生じる可能性は十分にある、と考えたほうがよいであろう。

現在のところ、軍はマオイストとの対決はせず、警察が取り締りを行う立場から彼らと対決する状況にある、というより実際にはマオイスト集団と遭遇することを避けている、といった感じであるし、一般大衆もそのようにとらえているようである。ネパールの中産階級やインテリ層の中には、軍が出てきたら軍事政権になり、ビルマやインドネシアのようになってしまうとの危惧があり、どこかで軍や現王室を抑えているのだらう、という憶測がもっぱらである。

ということ、私は九月十五日にノートに記してランタンヒマールに出かけたのだが、山から下りてきてみると事態はさらに深刻化していた。また十月下旬にクーンブヒマールか

ら帰ってからネパールの知人や在ネパールの日本人から見聞いたことはあまりにも衝撃的であった。

私は、ランタンヒマール下山途中の九月二十五日、タルケギャンでテレビを見ていた。すると「前日の二十四日、ドルボ地区ドゥナイで警察とナショナルバンクが襲われ、警官十四人が死亡、銀行の金はすべて強奪される」というニュースが入ってきた。さらに翌二十五日にはラムジュンで警官八人が殺されるという事件が起こった。二十六日にはメラムチコーラ河畔のタラマランで、マオイストに襲撃されたばかりの焼けただれたポリス・オフィスを目の当たりにもした。

十月下旬カトマンズに戻ってみると、日本大使館から日本人向けに新たな情報が提供されていた。それによれば中西部のロールパ、ルクム、ジャジャルコット、サリヤン、カリコット郡に「渡航延期勧告」が発出され、カリコット、ビュータン郡に出ている「注意喚起」を「観光旅行延期勧告」に変更、西部ゴルカ郡は「観光旅行延期勧告」継続、中部シンズリ、カブレパランチョーク、シンデューパルチョーク、ドラカ、ラメチヤップ、ヌワコット、ダディン、マクワンプール郡に「注意喚起」、東部オカルデユンガ、コタン、ウダヤブ

ールの各郡に新たに「注意喚起」が発出されていた。

このような状況であるにもかかわらず、私がカトマンズで接触した日本人トレッカー、観光旅行者、NGO関係者のほとんどがこうしたことを全く認識していず、背筋の寒くなる思いであった。

カトマンズ帰着後、さらにいろいろな筋から入手した情報では、最近市内の国内企業はもとより、外資系企業に至るまで、マオイストに献金せざるを得ない状況であるという。ちなみにその手口は、りゅうとした服装で企業オーナーに面会を求め、「あなたの家族構成はしかじかですね。子どもさんはどこそこの学校の何年生ですね。家族や子どもさんは愛しいでしょう。そこでわれわれに然るべき協力金を出していただきたい云々」と凄み、日本円にして数百万円単位の金を脅し取ったり、中小企業などには電話で同様の脅迫が行われているという。

一般大衆は、中小企業に対する小規模な金銭を強要するような手口は似非マオイストがやっていること、との思いが強いようである。最近は一家庭にまで被害が及ぶようになってきており、実際に以下のような話がある。中産階級に属するネパール人の家で家屋を改築したところ、

マオイストと名乗る人物がやってきて、「家を改築するだけの金があるなら組織に献金せよ」と脅迫され、何がしかの金を取られた。またある家で、怠け者の召使を解雇したところ、マオイストと名乗る三人の男がやってきて、「解雇は不当である」として金を脅し取られた。それにもかかわらず警察はほとんど手をこまねいている状態であるという。

十月二十三日の新聞には、市内の某私立学校に白昼マオイストと名乗る男たちがやってきて、事務方を脅して金を奪おうとしたが金庫が開かず果たせなかった。そこで教職員を集めて身体検査をして金品を強奪し、退去際に教職員の顔に黒ペンキを塗ったとつていった、という記事が載っていた。

それともう一つ、短いが非常に気になる記事があった。二十二日にジャジャルコットで、マオイストが軍隊に対して発砲してきたので軍も応戦した」とある。もしこれが事実であり、今後同様なことが頻発すれば、軍とマオイストの対決という構図が生じ、やがては軍政施行ということも起こり得る。そうなると十年前、多くの人々の犠牲の上になったネパールの民主化は一体何だったののだろうか、ということにもなりかねないであろう。

一九三三年三月十八日付 「ニューヨーク・タイムズ」 を読んで 星野修二

表題の記事を読んでいろいろと参考になりました。提供された本多氏および掲載の労をとられた編集委員の方々にお礼を申し上げます。

この記事はマロリーが一九三三年に行った米国での三カ月にわたる講演旅行に関連して書かれたと思います。英国エヴェレスト委員会が第三次遠征の資金を集めるため、第一次大戦後の経済的繁栄を誇る米国に大きな期待をかけ、資金集めの講演旅行を計画し、マロリーが引き受けたという形でしょう。

三カ月の間に何回講演をしたかはわかりませんが、おそらくかなりの回数だったはずで、この間、氏の講演は実に滑らかで生き生きとしたものになってきたと言われています。この新聞記事も、氏の落ち着いた礼儀正しい話し振りは、あの厳しい登山行為をやった同一人物とは思えないという聴衆の印象を伝えていると思います。マロリーとしても、資金集めが目的ですから、多数の共感を得るために話の筋に工夫をしただろうし、まして人の反感を呼ぶようなことは避けたでしょう。

実際にあの有名な言葉が発せられたかどうかは、きちんとした証拠がないという人もいますが、私は似たような言葉はあったと思います。この言葉は上記の講演振りがから考えるときと平常心で静かに語られたはずで、一方米国の聴衆のほうは、自然科学の上に新しい奇手を成し得るかわからない冒険行為に、必ずしも共感していなかったようで、この記事からも幾分距離を置いたような態度が読み取れます。英国人の聴衆とは相当な差があったようです。そんな具合ですから、なぜ危険なことをやってみて、エヴェレストに登るのかと思う人はかなりいたと思います。現に寄付が大して集まらなかったことも、この空気を物語っています。マロリーの呼びかけと理解への努力は必ずしも成功しなかったと言えるでしょう。

こうした慣れた話し手と、そのつど新たに入れ替わる聞き手との対応状況の中で、マロリーは、聴衆が最も理解しやすいように、高地の自然条件の並外れた厳しさに焦点を当て、これを客観的に淡々と述べるように努めたと思います。登山家の精神と労苦のような内面的な事柄については、物欲しげに思われることは避けたいだろうし、事実を語る中でわかってほしいということだったでしょう。

エヴェレストが存在したとしても、これに登る情熱がなければ登れません。「エヴェレストがあるから」という答えはこの意味で答えになつていません。人の聞きたいのはこの情熱の部分だからです。しかしここは人間の意志や情感に属するので、説明が一番難しいところだし、ましてこの状況の中ですからくどくどしく言う気はなかったと思います。

マロリーがこの中間項を故意に省略したことは一つの選択であり、これを私は主題を外したと言ったわけですが、こういう話し方によって、マロリーの不屈の意思がかえって浮き上がったとも言えるでしょう。これは氏が真実を言っていないのではなく、人間精神に関わる真実の表現だと思っています。

新ハイキング選書

【第4巻】改定第2版 一等三角点のすべて

多摩雪雄編 B6判・350頁・定価1890円(税込)
都道府県別に一等三角点を地図上に明示。一等三角点の詳細な解説、一等三角点研究の決定版。

【第9巻】第3刷 一等三角点の名山100

B6判・336頁・定価1632円(税込)
100山すべてコース図と写真入りで実用性が高い。

【第18巻】改定第2版 一等三角点の名山と秘境

A5判・340頁・定価1837円(税込)
全国一等三角点の地方別の配置図と全国の一等三角点の総覧が付いている。一等の山100座を紹介。地図が大きく見易い。

【第20巻】一等三角点の山々

A5判・310頁・定価1680円(税込)
一等三角点の山シリーズ。280山の総索引と高度順一等三角点100座が付いている。80座を紹介。
第9巻、第18巻、第20巻のガイドの山は重複しません。

新ハイキングの見本誌はハガキで申し込めば無料で送付します。
新ハイキング社 〒114-0023 東京都北区滝野川7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

リュックサック編集委員会・編 『リュックサック八十周年記念号』

一九二三年の創刊以来、早稲田大学山岳部の輝かしい記録を掲載してきた『リュックサック』の総集編。内容は第一部が「山岳部八十年の歩み」で、年表、登山略史、『リュックサック』と早大山岳部、映像記録、神の田圃で構成され、第二部は「山、人、時代」として八十年にわたる歴史の中でそれぞれの時代を代表する二十五人によるエッセー、記録、論評などが収録されている。

年表は歴年表示で見やすく、年ごとの主だった山行、行事、論説に写真などを添え、年表にありがちな無

味乾燥を補っている。

登山略史では、英国山岳会流の日本山岳会、ブルジョア登山と目された慶応、学習院などに対抗？して独自（時代背景から労働運動ばりの主張も目につく）のガイドレス登山を称え、スポーツアルピニズムの追及からヒマラヤへの夢を語った戦前、戦時中の山登りと山岳部の閉鎖、戦後の再建とJAC学生部の誕生、マナスル遠征を契機とする早稲田の海外遠征、女子部の誕生と廃止など、同山岳部がたどった波乱に満ちた歴史が語られている。

読者にとつては『リュックサック』を第一号から十三号（今年発行予定）まで通読する労を省略できるわけで、多少重い（二・二キロ）とはいえ、それに十分応える「重み」を持った内容となっている。

（山田二郎）

二〇〇〇年十一月稲門山岳会発行 四二四ページ（ご希望の方は中野区新井二・一・一 ランドコープ 8F 稲門山岳会事務局へ。JAC会員には実費五千元の一割引、郵送料五百円で頒布します）

阿部幹雄・著

『生と死のミニャ・コンガ』

本書の表題の次ページに「貢嘎の東 氷河に眠る者たち 安らかに」

と三行だけ記されている。

著者は北海道山岳連盟隊を中心にしたミニャ・コンガ登山（一九七九年五月〜九六年九月）に若いメンバーとして参加した。八一年五月十日、第一次登頂隊十二人の一人として未踏の北東稜を風雪の中、頂上直下七四五〇メートルに迫りながら、一名が北壁に滑落、登頂を断念した先頭集団七名は一本のザイルを前後で確保しながら五名が連続して下山する。二ピッチ目に滑落が始まり、次々と落ちてゆく。驚きと恐怖の顔、目。しかし誰も声もあげない。停止の態勢をとる者もない。ザイルに繋がって目前を落ちていく——十七時二十分。

生かされた著者に、もう一つの貢嘎山が生まれさすらう。十五年を区切りとしたレクイエムの書である。また遭難、生と死、魂とは何かを問う書でもある。

貢嘎山（七五五六メートル）は成都から約四〇〇キロ、チベット高原東端大雪山脈の主峰で「ミニャ王国の氷雪の白い山」ミニャ・コンガと呼ばれている。初登頂は一九三三年十月、チベット側から北西稜を登攀した米国。第二登は一九五七年六月、北西稜から中国。第三登は九七年五月、札幌山岳会の東面より北西稜からで日本人としては初登頂である。

八二年四月、市川山岳会による北東稜からの松田隊員の「奇跡の生還」は忘れられない。三章は行方不明となった四人と重なる。本書は序章から終章まで死者の魂で終わり、遭難とは？と問題提起している。

（三沢一三）

二〇〇〇年九月 山と溪谷社発行
三一八ページ 千七百円

上村信太郎・著

『その山登り 間違ってますか』

一般社会にはいろいろとルールがあるように、登山界にもルールが存在する。二十世紀最大ともいわれる登山人口の増加で、各山ともルール違反の増加も目立つ昨今である。本書の著者は、海外登山や山の執筆に明け暮れた多忙な日々を送っている。著者が書いた一部の分類である。

一、登山パーティーの欄で「リーダーがいいつも先頭を歩く、その他」。
二、入山するまでの間違い「家族に行く先を教えないで出る、その他」。
三、登山行動中の間違い「クサリ場・ガレ場で休息する、その他」。
四、入山中の間違い「弁当の食べ残しを山に捨てる、その他」。

以上で、わが身に覚えのあることがばかりである。中でも共鳴したのが、

今の中高年にブームをひき起こしている日本百名山達成のための登山である。それも、一人の登山家の登った山であり、いくら優秀な登山家が登ったと言っても、人間には個性が存在する以上、一人ひとり山の好みが違うのは言うまでもない。

元来日本人の悪いところで、大衆心理が芽生えて、登山でも同じ山に集中する癖があり、個性ある山人であつてほしいと願うのみである。

(樋口宗二)

二〇〇〇年八月 山と溪谷社発行

二〇六ページ 九百五十円

P・ステイル・著／倉知敬・訳

『エリック・シブトン』

―山岳探検家・波瀾の生涯―

エリック・シブトンといえば今や歴史・伝説的登山家として受け取っている人も多い。一九〇七年に生まれて一九七七年に七十歳で死去しているの、まぎれもない二十世紀人である。

彼のヒマラヤでの目覚ましい活動は一九三三〜三八年と第二次世界大戦後の一九五一〜五二年で、世界の注目を集めた。一九五三年のイギリス・エヴェレスト登山隊の隊長人事をめぐり確執から身を引くと、一九五八年より一転して南米パタゴニアの探

検的登山に身を投ずることになる。

彼自身の言葉を借りれば「傷ついた自尊心を烈風吹きすさぶ氷雪の大地において、わが肉体を痛めつけることで癒そうとするマゾヒズム的行為の結果だ」というのである。しかしながら六年間に及ぶ彼のパタゴニアにおける探検的登山の成果は、ヒマラヤにおける業績に劣らぬ先駆的なものであった。

一九六五年、アルパイン・クラブはシブトンを会長に推戴し榮譽をもつて彼に報いた。

生前シブトンは、彼の山行を自伝風に書き残している。『わが半生の山々』(大賀二郎、倉知敬訳)、『未踏の山河』(倉知敬訳)。彼の繊細な感性を通して語られる数々の探検的登山行は、内に秘めた強靱な精神力を支柱としており、何のてらいも誇示もなく、むしろ淡々と述べられていく。彼の自尊心をいたく傷つけたであろう一九五三年エヴェレスト登山隊長更迭問題ですら極めて抑制された表現で述べられ、私生活については断片的ですらある。

それにもかかわらずシブトンの二つの自伝的山行記は今日既に山岳書の古典としての地位を占めているといつてよい。

これに対し、ピーター・ステイルの書いた本書は、シブトンが触れ

ることをできるだけ避けた彼自身の心の内面や、私生活を詳細に描き出している。これはステイルが一九五四年、エスクデールの海外登山専門学校校長であつたシブトンに教えを受け私淑していたこと、シブトンを取り巻く幾多の生き証人にインタビュすることができたことなどがこの伝記の質を確かなものにしていく。

一九六六年一月、パタゴニアへの入口・プエルトモントの空港から市内へのバスで隣席を乞ひ、パタゴニア登山の要諦について教えを受けた筆者にとつて、強い精神力を秘めた深く澄んだ青い瞳と、いたずらっぽそうな笑顔の好々爺が、一人の偉大な人間性へと焦点を結んでいくのを実感した。

(安間 荘)

二〇〇〇年七月 山と溪谷社刊

三九七ページ 二千八百円

HARISH KOHLI・著

『across the frozen

himalaya』

インド陸軍退役軍人が九五年、カラコルム峠からネパール手前のリプレク峠まで二〇〇キロメートルを、スキーで九十七日間かけてたどった紀行文。チベットとの国境沿いをルートとし、食糧やテントを含め平均

三六キログラムの荷を背負つて谷を滑り、峠(四〇〇〇メートル以上の二十の峠)を越えた前例のないスキーツアーである。

スタート点のカラコルム峠(五五七五メートル)にたどり着いたのは二月十七日午後四時十五分。気温は氷点下四八度。カメラは凍りついて作動せず。三時間の滑降予定が、下山を始めるや吹雪になりほうほうの体でキャンプ地に着いたのは明け方の午前四時半。七人の隊員が凍傷を負う惨事からこの大ツアーは始まった。全行程を走破した二人の他に、同行隊員を六回入れ替え、食糧、燃料の補給を十一カ所で行っている。

雪崩、クレバス、ホワイトアウト、幻想、狼や雪豹のいる地での幕営など、気の安まらぬ毎日が続く。一方、好天の日にはシブリン、カメット、トリスリ、ナンダ・デビといった巨峰や霊峰を眺め、大雪原で滑降中に居眠りして仲間同士が衝突するといったハプニングもあった。

随所に探検史、チベット仏教の行事、伝承が紹介されており興味をそそる。貴重な写真を含め、ツアー愛好家に参考になること多し。

(南井英弘)

INDUS PUBLISHING COMPANY,
NEW DELHI 二九六ページ 五
九五ルピー

図書受入報告 (2000年11月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
長田健三	大山季彩:長田健三写真集	111pp/20cm	長田健三(私家版)	2000	著者寄贈
福岡まいづる山岳会(編)	創立45周年記念シンガー・チュリ登山報告書	81pp/26cm	福岡まいづる山岳会	2000	発行者寄贈
下関山岳会(編)	稜線(第5号):下関山岳会創立70周年記念号	283pp/26cm	下関山岳会	2000	発行者寄贈
沖允人(編)	上海チベット一万キロ:国際クリーン・エネミー 学術調査隊帰国報告書	141pp/30cm	足利工業大学	2000	編者寄贈
J R 西日本山岳連盟	未踏峰に挑む:中国・崗則吾結峰初登頂の記録	139pp/26cm	J R 西日本山岳連盟	2000	発行者寄贈
東京大学山の会(編)	輝けるとき記憶:山と友II	448pp/22cm	東京大学山の会	2000	発行者寄贈
小谷明	辺境の旅 悠久のロマン	253pp/21cm	実業之日本社	2000	著者寄贈
兵頭二十八	日本のロープウェイと湖沼遊覧船	256pp/23cm	教育システム	2000	出版社寄贈
峡彩ランタン会(編)	ラテルネ10周年記念号	548pp/26cm	峡彩ランタン会	2000	発行者寄贈
北区飛鳥山博物館(編)	岳人冠松次郎:その生涯とアルピニズム	47pp/26cm	東京都北区教育委員会	2000	編者寄贈
藤田健次郎	アジアの山紀行:身近な海外登山とトレッキングのすすめ	286pp/19cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
中村保	深い浸食の国:ヒマラヤの東 地図の空白部を行く	381pp/23cm	山と溪谷社	2000	著者寄贈
山と溪谷社(編著)	自然について、私の考えを話そう。	237pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
羽根田治	生還:山岳遭難からの救出	252pp/19cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
日本山岳会静岡支部(編)	不盡:日本山岳会静岡支部創立50周年記念誌	137pp/26cm	日本山岳会静岡支部	2000	発行者寄贈
益田幸郎	カナディアンロック・トレッキング(気球の本シリーズ)	212pp/19cm	N T T出版	2000	著者寄贈
日本ヒマラヤ協会(監修)	ヒマラヤへの挑戦:8000m 峰登頂記録	320pp/27cm	アテネ書房	2000	出版社寄贈
早大山岳部・稲門山岳会	チョンムスターグ(6962m)初登頂	97pp/21cm	早大山岳部・稲門山岳会	2000	発行者寄贈
村木潤次郎 他(編)	リュックサック:早稲田大学山岳部創部80周年記念号	423pp/21cm	早大山岳部・稲門山岳会	2000	発行者寄贈
写真フォーラム潤沢(編)	写真集「穂高」:その流れに沿って	86pp/31cm	東京新聞出版局	2000	出版社寄贈
三木慶介	登(の)まる:三木慶介作品集	39pp/35cm	光村印刷	1997	著者寄贈
ウィング(編)	山稜'98 :全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	151pp/22cm	全日本山岳写真協会	1998	清水正己氏寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜'99 :全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	191pp/22cm	全日本山岳写真協会	1999	清水正己氏寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2000:全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	201pp/22cm	全日本山岳写真協会	2000	清水正己氏寄贈
日本勤労者山岳連盟(編)	登山と自然の科学Q & A	221pp/21cm	大月書房	2000	出版社寄贈
東北地区海外登山研究会(編)	至上の頂チョモランマ:チョモランマ2000登山隊の記録	130pp/31cm	東北地区海外登山研究会	2000	発行者寄贈
Severskiy, I.V. et al.	Snow Cover and Avalanches in Tianshan Mountains	179pp/26cm	VAC Publishing House	2000	V. Popov 氏寄贈
Belden, David	L'Escalade: Connaissance et Technique	259pp/25cm	Denoe	1987	山岡健志氏寄贈
Edlinger, Patrick	Rock Games: Escalades aux USA	158pp/31cm	Arthaud	1986	山岡健志氏寄贈

会務報告

十一月理事会

日時 十一月八日 十八時三十分～

二十時四十分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、

宮崎、高原、村井(葵)、宮下、鯉坂、南川(高遠代理)、増山、勝山、坂井各理事、中村監事、中川、平山、平野、吉永各常任評議員

【委任】河西、松原、坂本各理事、神崎監事、田邊常任評議員

【審議事項】

一、平成十二年度(第三回)秩父宮記念山岳賞(竹内副会長)

山岳博物館散歩・・・9

大迫町立山岳博物館



昭和46年の開館。大迫町の名峰 国定公園早池峰のハヤチネウスユキソウとアルプスの名花エーデルワイスが取り持つ縁で、昭和40年にオーストリア国ベルンドルフ市との友好都市締結を記念し、ベルンドルフから若い女性建築家を招き設計を委託、大迫の大工の手になるチロル地方の民家風の小さな博物館です。

展示構成は以下のとおりです。

1、早池峰の植物。特産種、稀有種、

南限種、北限種などをレプリカ・写真などで展示。

2、早池峰山麓の動物の剥製・標本・写真など。

3、坂倉登喜子氏のエーデルワイスコレクション。

4、楨有恒、植村直己氏ほか日本の著名岳人の書簡、ピッケルなど山岳資料。

5、戦前からの山岳会機関紙、山岳雑誌、山岳名著など。閲覧自由。

6、大迫町とベルンドルフ市との昭和40年以来の友好交流関係資料多数。(館長・一ノ倉俊一)

大迫町立山岳博物館

開館時間 9:00～16:00

休館日 月曜日 祝日 年末年始

観覧料 大学生・一般 100円

小・中・高校生 50円

問い合わせ 〒028-3203 岩手県

稗貫郡大迫町大迫3-39

TEL&Fax 0198-48-3020

審査委員会(委員長・木下是雄)は大蔵喜福会員の「マッキンリー通年気象観測の成功とそれを通じての若手登山家の育成」を、別添えに示す業績に基づき、今年度の授賞候補として推薦する。なお副賞として二十万円を贈る。

承認 二、平成十二年度会長特別表彰について(西村)

候補者として山本俊雄会員(会員番号一〇四〇八)を年次晩餐会の席上表彰したい。授賞理由は今年度、法政大学チョモランマ登山隊二〇〇〇に登山隊長として参加し、五月十九日、北稜よりシェルパ二名と、世界最高年齢六十三歳五ヵ月で登頂に成功(従来は六十歳五ヵ月)。記録を塗り替え、話題を提供した。承認 三、日本山岳会創立百周年記念切手の発行申請について(西村)

百周年となる二〇〇五年に郵政省に記念切手の発行申請を行う。承認 四、特定預金(図書出版研究基金)の「長期計画準備積立金」への振替について(村井龍)

図書出版研究基金は、創立七十周年記念出版の収入をもって設立され、一部は図書購入に利用された。その後長い年月利用されず現在に至っており、平成十一年度の監査報告で改善事項として指摘されていた。そこで今回「長期計画準備積立金」に振

り替え、戦略的な運営を図るよう改善案が示された。設立当時の関係者(望月達雄、近藤信行、山本良三の三会員)に図書委員会担当理事が説明後決定する。継続審議

【報告事項】

一、名誉会員推薦(中川)

十月二十八日開催の評議員会で本年度の名誉会員推薦は見送りとした。

二、山岳四団体「山岳保険・共済」に関する懇談会参加(西村)

日本ヒマラヤ協会より「ヒマラヤ登山者アンケート調査」でも「山岳保険・共済制度」に対する関心が高いことを受けて、懇談会開催の呼びかけがあった。高原理事、総務委員一名で懇談会に参加する。

三、年次晩餐会の進捗状況(西村・坂井)

①十月二十七日案内書を発送。

②会員の声を反映させ、支部会員の座席指定、テーブルマスターを中止。新入会員紹介は壇上で行う。

③フォーラム「JACが挑んだ世界最高峰への足跡」はコディネーター・伊丹、パネリスト・平林(七〇年)、重広(八〇年)、山本(宗)・湯浅(八八年)の各会員を予定。

④「山岳写真展」は展示作品六十一、その他プロの会員による特別展示も。

四、資料等使用許可願い報告(西村)

(株)ウォークよりウェストン夫妻の

写真をビデオシリーズ「日本の森自然紀行(仮題)」(平成十三年春刊行予定)へ使用許可願ひ。

五、支部長会議開催(高原)

十二月二日十時三十分より新高輪プリンスホテル「紅玉」で開催。議題など事前に総務担当に連絡を。

六、カナダ山岳会晩餐会に出席(大森副会長)

十月二十八日開催のカナダ山岳会年次総会、晩餐会に出席した。総会では各委員会が予算に基づく経営的事業運営の印象を持った。晩餐会は三百四十名くらいの出席者で、段取りはプロに依頼しているようだ。

七、会員アンケートの実施(西村)

十月二十七日、年次晩餐会案内に同封して全会員に発送、順次返送されているので、集計に入る。

八、委員会報告

財務委員会・村井(龍)

①月度の会計報告

②今年度上期(四、九月)の新入会員数は百四十名。

③予算達成率は収入七五パーセント、支出三八パーセントで平年並み。

会報編集委員会・村井(葵)

「山」十一月号巻頭は「K2南南東リブ稜」山野井泰史、「早稲田大学チヨムススターグ登山」大谷映芳。

海外連絡委員会・増山

①年次晩餐会出席予定者はカナダ山

岳会モータイマー会長夫妻、サン・フォード副会長、ロウ登攀隊長。費用は、晩餐会は当会負担、「アルパタプロジェクト二〇〇〇」より捻出。

②日カ協会創立七十周年記念パーティーへは当会関係者三十七名が出席。熊崎登山隊長が報告予定。

山研運営委員会・森(坂本代理)

①十月二十九日閉所、来年四月二十八日開所予定。ミニ水力発電装置も運転を停止し、冬支度を行った。

②今年度の利用者は八百八十八名。

集会委員会・勝山

指導委員会と共催で十月十五日第一回スポーツクライミング講習会を昭島市の多摩スポーツ会館内の室内壁で実施。二十歳から七十六歳まで二十四名が参加。今後毎年二、三回、定期的開催を検討している。

自然保護委員会・竹内副会長(河西代理)

①自然保護全国集会を十月十四、十五日、福井支部の協力により福井県大野市で開催。「百名山ブームが自然環境に及ぼす影響について」(百名山と登山道の荒廃)をテーマに熱心な討議を行った。十五日は荒島岳登山。

②「山岳会高尾の森」に対し(社)国土緑化推進機構より補助金百万円が振り込まれた。「実行委員会」を作り活動強化を図りたい。委員に山川陽一会員を追加。③十月二十八日参加者

三十六名で現地作業を実施。次回は十一月十八日。

資料委員会・鰐坂

①十月二十一日、東京都北区飛鳥山博物館で第四回山岳博物館等連絡会議を開催。資料のデータベース化、保存、特にフィルム、ビデオテープの劣化などについて貴重な指導、意見が得られた。

②茨木猪之吉画伯の次女、横山駒子氏より油絵三十二点、水彩画十二点、スケッチブック三十二冊、写真一点の寄贈があつた。

九、その他

●今年、大学生(中央、慶応、成蹊、青学)の山岳遭難死亡事故が多発している。関係委員会で再発防止を検討したい。(宮崎)

●アメリカ山岳会で会員の意識調査を実施しているので、当会のアンケートと比較する意味からも詳しい情報、資料を入手するとよい。(中村)

●アメリカ山岳会のベイス元会長夫妻が当会を来訪。(宮下)

●会員異動

物故
森脇龍雄(八四一八) 00・1・6
柴田昌亮(五三二六) 00・5・1
山岸猛男(五四三二) 00・5・17
鳥飼和清(九七九二) 00・10・26
兼山信次(九二三七) 00・11・3
港 叶(二四五八) 00・11・24

終身会員

土合敦彦(四七一七)
熊谷義信(五一二三)

ルーム日誌

11月

1日 フィルムビデオ(委)

6日 総務(委) 資料(委) データバンク(委)

7日 常務理事会 アルパインスケッチ(ク)

8日 理事会 会報編集(委) 山岳写真展実行(委) ジャック93会 99同期会

9日 山の自然学(研) 青年部

10日 フォトビデオ(ク)

13日 アルパインスキー(ク) 山げらの会

14日 学生部 二火会 アルパインスケッチ(ク) 95同期会

15日 山研運営(委) 三水会

16日 科学(委) 学生部 98同期会

17日 青年部

20日 総務(委)

21日 図書(委) 集会(委) 百年史(委)

22日 インターネット小(委) アル

27日 パインスキー(ク)

28日 総務(委)

29日 自然保護(委)

97同期会 11月来室者598名

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆会員アンケートご協力のお礼

アンケート実行委員会

今回実施した第四回目の会員アンケートは三四五名(五四パーセント)の回答をいただきました。平成六年に実施した第三回の二二五一名(五一パーセント)を上回る回答です。ご協力に厚くお礼申し上げます。

皆さまから寄せられた貴重なデータを集計・解析し、会の長期計画づくりや年度事業計画、収支予算策定などに、有効活用させていただきます。(委員長・西村政晃)

◆第二十九回山岳史懇談会

図書委員会

日時 平成十三年二月二十八日(金)十八時三十分

場所 日本山岳会集會室

講師 二宮洋太郎氏(元第二次RCC代表)

C代表

演題 第二次RCCの「あしあと」

◆講演会「日本の山岳景観」

科学委員会

「日本の山岳の生い立ちとは?」「北アルプスの白馬岳など、なぜ東斜面が切り立っているのだろうか?」私たちが日頃不思議に思うことを、世界の山々と比較しながらやさしく話していただきます。

日時 三月十五日(木)十九時

場所 日本山岳会集會室

講師 小嶋 尚(明治大学教授)

問合せ 石田要久(TEL・〇九〇・三二二六・二八四八)

◆「北高尾の森」づくり体験

自然保護委員会

昨秋三回実施した高尾の森づくりは始まったばかり。下草刈りや間伐、広葉樹の名札付け、植林、作業道の整備などやらなければならぬ仕事が増えています。二十一年の豊かな森づくりを一緒に体験しませんか。

日時 第五回地こしらえ他(二月十七日)、第六回地こしらえ他(三月十日)、第七回植樹祭(四月十四日)、第七回植樹(四月十五日)

集合 JR高尾駅前高尾森林センター

申込 九時

住所、氏名、電話番号、ファックス番号を明記、山川陽一宛(〒二〇六・〇〇一三多摩市桜丘四・四二・五 Fax 〇四二・三七四・七一六五)

◆二〇〇一年度国際ボランティア

隊員募集

ヒマラヤ・グリーン・クラブ

当クラブは世界第二の高峰K2に源を発するインダス河上流のパキスタン北東地域地域の村々で「ヒマラヤに緑を取り戻そう」という運動を一九九三年から進めています。現在までポプラ、ヤナギ、シラカバ、カラマツ、リンゴ、アンズなど約三万本の樹木を育てました。教育、医療保健活動にも取り組んでいます。

対象者 ①植林(学生・一般)、②教育(学生・一般)、③医療(医師・看護婦・医大生)、④自然エネルギー発電(専門家)

活動日程

A隊 三月十九日～四月六、九日

B隊 三月二十三日～四月六、九日

C隊 四月六日～四月二十七日

D隊 四月二十三日～五月十四日

E隊 五月二十八日～六月二十九日

(樹木保護とK2へのトレッキング)

F隊 七月二十日～八月十日(コセルガン峰登山・トレッキングを含む)

G隊 八月六日～二十七日(各種ボランティア活動)

H隊 八月二十日～九月十日(来年度計画の予備調査を含む)

費用 二十～三十万円

◆編集後記

新しい世紀の開幕を寿ぎ、会員の皆さまの安寧を念じます。

前号で二十世紀の高峰登山を総括しました。多様化の波の中からJACの目指す山登りの青写真が浮かびあがればと願っています。

登攀史に鼓舞されて、マカルーからローツェ・シャール、ローツェ、サウスコルを越えてエヴェレストに至る真正正銘、世界の屋根の大縦走の初夢を見てしまいました。

JACならではの知恵を結集して潮流に即応した独創性のある山登りの構築を期待します。(村井 葵)

日本山岳会会報 山 668号

2001年(平成13年)1月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ: <http://www.jac.or.jp>

Eメール: jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社